

< 論 説 >

『ハムレット』における natural feeling という意味の
nature について

辻 照 彦

は じ め に

シェイクスピアの作品を読むとき、その意味の理解にしばしば困難を覚える単語に nature がある。nature は現代英語でも様々な意味を持つ単語なので、その意味の理解に注意しなければならないのは現在でも変わらない。しかし、シェイクスピアの作品を読む際には、現在は普通に使われている意味であってもシェイクスピアの時代にはまだ一般的ではなかった意味や、逆に、シェイクスピアの時代には一般的であった意味でも今では廃れてしまった意味があるため、問題はより複雑になり、読者は一層注意しなければならない。nature という単語をシェイクスピアは比較的多用しており、特に円熟期の作品と言われる四大悲劇ではキーワードの1つと言ってよいほど多用されている。

nature の意味は多岐にわたるが、OED はそれを4つに大別している。

1. 本質、本性（物質の本質的な特性や人間の生得的気質、性格。）
2. 人間の活力、体力（名詞 nature の使用例としては、1250年と一番古くなっている。）
3. 本能的要求、本性（人間あるいは動物の行動、性格を方向付ける先天的で支配的な力、あるいは衝動。）
4. 物質世界の創造的力、その象徴としての自然の女神（人間を取り巻く環境、あるいは、文明と対比される自然の意味で nature が使用され始めたのは17世紀以降とされている。）

我々がシェイクスピアの作品を読むときに特に戸惑うのは、現代版テキストで natural feeling あるいは natural affection と注釈されている nature の意味である。OED はこの意味を3番目のグループに分類し、現在では方言的であると注記している。シュミットは nature のこの意味を “native sensation, innate and involuntary affection of the heart and mind” と定義している。

本論では、『ハムレット』の中で natural feeling あるいは natural affection という意味の nature が使用されている4つの例を見ながら、シェイクスピアがこの単語をどのように使用しているか、その特徴を見ていきたい。また、natural feeling や natural affection と定義されても nature

の意味は実はよく分からない。使用例を見ながら、*nature* という単語をシェイクスピアがどのようなニュアンスで使用しているのかを見ていきたい。

例 1

最初の例は1幕2場の冒頭である。デンマーク王クローディアスは居並ぶ廷臣の前で、ガートルードを妃としたことを次のように告げる。*nature* は5行目に出てくる¹⁾。

【例1】

Though yet of Hamlet our dear brother's death
 The memory be green, and that it us befitted
 To bear our hearts in grief, and our whole kingdom
 To be contracted in one brow of woe,
 Yet so far hath discretion fought with nature
 That we with wisest sorrow think on him
 Together with remembrance of ourselves.

5行目の *nature* は、この一行だけを抜き出してしまうと、その意味を理解するのは困難になるかもしれない。*fought with* という表現が使用されていて、*with* はここでは *against* の意味なので、*discretion* と *nature* は相対立する概念である。よって、*nature* は思慮分別や理性的判断の対極にあるものだと推測することはできる。読者によっては、道徳劇の場合のように、*discretion* と *nature* を擬人化された敵同士と考えるかもしれない。

しかし、例1の引用全体を眺めれば、*nature* の意味を理解するためのヒントが前後に並んでいることが分かる。まず、*discretion* と *nature* の組み合わせは直後の *wisest sorrow* という表現で実質的にパラフレーズされている。*discretion* は *wisdom*, *common sense*, *reason* といった意味で、その形容詞 *discreet* は *wise* とほぼ同義である。よって、*nature* は *wisest sorrow* のうち *sorrow* という名詞によってここでは言い換えられていると考えられる。

nature に限らず、単語の意味が対比やパラフレーズによって明確にされることは珍しいことではない。例1の台詞の直後のガートルードの台詞にも、対比とパラフレーズによって *nature* の意味が理解しやすくなっている例が見られる。ガートルードがハムレットに向かって、いつまでも父の死を嘆き続けるのを止めるように忠告する場面である。1幕2場68行目から引用する。

Good Hamlet, cast thy nighted colour off,
 And let thine eye look like a friend on Denmark.

Do not for ever with thy veiled lids
 Seek for thy noble father in the dust.
 Thou know'st 'tis common: all that lives must die,
 Passing through nature to eternity.

ここに出てくる nature もあまり一般的な意味とは言えない。しかし，“Passing through nature to eternity,” という表現の中の eternity との対比から nature の意味が何か有限なものに限定されてくる。さらに，“Passing through nature to eternity,” という表現は、実質的には、直前の “all that lives must die,” を言い換えたものになっているので、ここでの nature はこの世に生きることなのだと思いがつく。

例1の台詞を始めから見ると、4行目までにも、“To bear our hearts in grief,” や “To be contracted in one brow of woe,” といった表現があり、grief や woe といった sorrow と同じ意味を持つ単語が繰り返し使用されている。よって、思慮分別や理性的判断 (discretion) の対極に置かれている nature とは、この場面では、愛する人の死を悲しみ喪に服すこと、あるいは、悲しみに深く浸ることを意味していることが分かる。

その悲しみの原因はもちろん先王ハムレットの死である。しかし，“Though yet of Hamlet our dear brother's death / The memory be green,” と表現されているように、悲しみの対象となっているのは、デンマーク王 Hamlet の死というよりも愛する兄の死であることが強調されていることに注意すべきだろう。兄弟愛より野心を優先させてしまったクローディアスの台詞なので偽善的に響くけれども、ここでの nature は、より正確には、兄の死に対する深い悲しみということになる。

また、この nature からは、discretion と対比されることで、意図的に抑制しなければ不合理なレベルにまで高まりかねないといった否定的なニュアンスも感じられる。“Together with remembrance of ourselves.” という表現からも分かるように、自分のことを顧みることなく、完全に悲しみに身をゆだねてしまう、あまりに感情的で非理性的な態度である。そもそも兄の死を悼む気持ちなど全く持たないクローディアスは、兄の死を悼む気持ち (nature) の強さを演じながら、同時にその否定的側面も巧みに強調しているのである²⁾。

例 2

2番目の例は1幕5場74行目からである。ここは、亡霊が自分の死は弟クローディアスによる毒殺であったことをハムレットに告げる重要な場面である。nature は81行目に出てくる。

【例2】

Thus was I, sleeping, by a brother's hand

Of life, of crown, of queen at once dispatch'd,
 Cut off even in the blossoms of my sin,
 Unhousel'd, disappointed, unanel'd,
 No reck'ning made, but sent to my account
 With all my imperfections on my head.
 O horrible! O horrible! most horrible!
 If thou has nature in thee, bear it not,
 Let not the royal bed of Denmark be
 A couch for luxury and damned incest.

上の引用の中で、nature が含まれる “If thou has nature in thee, bear it not,” という台詞は、長い亡霊の台詞の中でも最後の方に出てくるもので、強い命令口調のため印象に残る台詞である。しかし、この1行だけから nature の意味を正確に理解するのは困難なのではないだろうか。また、引用全体を見ても、nature の意味を推測するための手がかりはほとんどないように思われる。確かに、“bear it not,” という部分は、それに続く2行で具体的にパラフレーズされている。しかし、前半の “If thou has nature in thee,” という部分にはパラフレーズや説明に当たる表現は与えられていない。わずかに、in thee という表現に注意することにより、ここの nature は何か心に関する意味なのではないかと推測できる程度だろう。例2の場合、シェイクスピアはほとんどヒントを与えることなく natural feeling の意味の nature を突然ここで使用しているように見える。

しかし、引用より前の台詞を読んでも、少し離れてはいるが、“If thou has nature in thee,” に似た表現が見つかる。21行目の亡霊の台詞から見てみよう。亡霊は、煉獄での恐ろしい苦しみの詳細を生きている者に告げることは禁じられていると述べて次のように続ける。

Ghost. But this eternal blazon must not be
 To ears of flesh and blood. List, list, O list!
 If thou didst ever thy dear father love —
Ham. O God!
Ghost. Revenge his foul and most unnatural murder.
Ham. Murder!
Ghost. Murder most foul, as in the best it is,
 But this most foul, strange and unnatural.

亡霊の台詞の中の “If thou didst ever thy dear father love —” は例2の引用文の “If thou has nature in thee,” と、また “Revenge his foul and most unnatural murder.” は “bear it not,” とそれぞれパ

ラレルになっていると考えられる。父を愛したことがあるなら、父のために復讐せよ、という亡霊の一番重要なメッセージはすでに一度はつきりと伝えられているのである。暗殺の詳しい内容はこの時点ではまだ説明されていない。犯人もまだ明かされていない。自分の死が殺人であったことと、その殺人が極悪非道なものであったことが *strange* や *unnatural* という形容詞によって強く示唆されているだけである。

父を愛していたのなら復讐をせよと言われて、ハムレットは自分が復讐に取りかかる素早さを猛禽が獲物に襲いかかるスピードにたとえて次のように述べる。

Ham. Haste me to know't, that I with wings as swift
 As meditation or the thoughts of love
 May sweep to my revenge.

Ghost. I find thee apt.
 And duller shouldst thou be than the fat weed
 That roots itself in ease on Lethe wharf,
 Wouldst thou not stir in this.

亡霊はここで、暗殺の詳細を述べる前に、息子ハムレットに父を愛する気持ちがあるかどうか、そして、その愛情が復讐という行動を駆り立てるほど強いものかどうかを試しているように見える。“I find thee apt.” の *apt* は、現在の適切などという意味ではなく、機敏な、反応が早いという意味であり、亡霊はハムレットの反応の素早さ、そのスピードに満足しているのである。そして、暗殺の真相を聞けば *stir*、すなわち、すぐに復讐に乗り出すことになると言って、再度、これから明かされる兄弟殺人の非道さを強調している。

亡霊は、その後約40行にわたって、午睡の最中にクローディアスに耳から毒を注ぎ込まれて、皮膚が樹皮のようになって死んだことと、妃ガートルードもクローディアスに誘惑されてしまったことを明らかにする。例2はその説明が終わった直後に出てくる台詞である。ここまでの亡霊とハムレットのやり取りを見てきた観客や読者にとって、亡霊の “If thou has nature in thee,” という台詞の意味はもはや誤解の余地がないと思われる。例2の場合、シェイクスピアはずいぶん前から *nature* の意味のヒントを用意してくれているように思われる。あるいは、*natural feeling* や *natural affection* という意味の *nature* に関わる問題がこの場面全体のテーマになっていると言うべきかもしれない。

亡霊が “If thou has nature in thee,” と言うときの *nature* は、一義的には、父を愛する気持ちである。しかし、亡霊は弟の *unnatural* さを盛んに強調している。つまり、*nature* を欠いたとき、人間はどのような非道な行動に走るかを強調している。したがって、“If thou has nature in thee,” と亡霊が言うときの *nature* は、何も人一倍強い愛情というのではなく、普通の人間であれば誰でも持っている親に対する敬愛というニュアンスなのではないだろうか。“If thou didst

ever thy dear father love—”という台詞も、正確には、一度でも父を愛したことがあるのならという控えめな条件になっているのである。しかし、その同じ nature からは、いったん愛する人に不当な仕打ちが加えられた場合には、復讐への衝動を即座に引き起こす瞬発性や、さらには復讐を義務として課す強い拘束性といったニュアンスも感じられるのである³⁾。

例 3

3番目の例は、ハムレットがガートルードの居室に向かおうとしている3幕2場383行目からの独白である。この面会は、ハムレットを母親と二人きりにすれば、胸の奥に隠している不満の原因を明かすだろうと考えたポローニウスが設定したものである。ハムレットは、母親と会ったときに興奮して暴力を振るったりしないように次のように自分に言い聞かせる。

【例3】

Soft, now to my mother.

O heart, lose not thy nature. Let not ever

The soul of Nero enter this firm bosom;

Let me be cruel, not unnatural.

I will speak daggers to her, but use none.

My tongue and soul in this be hypocrites:

How in my words somever she be shent,

To give them seals never my soul consent.

“O heart, lose not thy nature.”という台詞だけを見て、この nature を natural feeling あるいは natural affection の意味に解釈するのは難しいかもしれない。実際、この nature には thy が付いていて、thy は heart を指すので、nature をものの本来の性質、本質の意味に解釈しても問題がないように思われる。しかし、その場合でも、heart は愛情が宿る臓器として知られていたもので、heart の本来の性質とは愛情を意味しているのだと見当がつくかもしれない。

しかし、シェイクスピアは400行目の後半から406行目にかけて nature を失うとはどういうことなのかを詳しく説明してくれている。まず、lose thy nature とは、ネロの心を自分の胸に入り込ませることであるとパラフレーズされている。ネロは母親を殺した暴君として有名なので、nature を失うとは、息子である自分が母に対して暴力を振るうこと、最悪の場合には殺してしまうことを意味している。

“Let me be cruel,”で始まる2行も基本的には同じことを言っている。cruel になろうと言っているのが、一見上の行と矛盾しているようにも感じられるが、ここでの cruel は現在の残酷な、残忍なという意味よりも、厳しいことを言う、歯に衣着せないという意味で使われている。次

の行でパラフレーズされているように、口からは短剣のような鋭い言葉を発しようということである。それに対して、unnatural, つまり nature を失うとは、実際に母親に短剣を向けることである。

最後の2行も基本的には上の行と同じことを言っている。言葉ではどんなに厳しく非難しても、その言葉をそのまま実行に移すことは許可してはならないと自分の心に命じているのである。これらのパラフレーズを参考にすると、nature を失うとは、ここでは母親に対して暴力を振るうこと、極端な場合には殺してしまうことを意味している。すると nature は、激高した人間が親に対して暴力を振りそうになったときに寸前でそれを阻止し、一線を越えることを許さない抑止力のようなものである。このように、例3の nature からは、子供が親に対して抱く愛情といった積極的なニュアンスではなく、子供が親を傷つけるような極端な行動を阻止する、子供の親に対する最低限の尊敬、義務といったニュアンスが感じられる。

例3の30行ほど後のポローニアスの台詞に、例3とは逆に、母親が子供に対して抱く愛情という意味に解釈できる nature が出てくる。ポローニアスがハムレットとガートルードの面会についてクローディアスに説明している場面で、3幕3場27行目からの台詞である。

My lord, he's going to his mother's closet.
 Behind the arras I'll convey myself
 To hear the process. I'll warrant she'll tax him home,
 And as you said — and wisely was it said —
 'Tis meet that some more audience than a mother,
 Since nature makes them partial, should o'erhear
 The speech of vantage.

ポローニアスは、ガートルードも今度ばかりは厳しくハムレットを叱るはずだと保証してから、ガートルードの居室の掛け布の後ろに隠れて、面会の一部始終を盗み聞きする計画を説明する。ポローニアスはこの策略をクローディアスの思い付きのように述べているが、本当は自分のアイデアである。

32行目の“nature makes them partial,”の中の them は意味的には mothers を指しているので、ここでの nature は、一般的に母親たちに偏った判断をさせる、つまりひいきさせる原因ということになる。それは常識的に考えれば母親の子供に対する愛情なので、ここの nature はシュミットなどにより natural feeling あるいは natural affection の意味に解釈されている⁴⁾。しかし、この nature は例3の最低限の尊敬という意味の nature とはまったく異なった響きがある。ポローニアスの台詞の nature からは、母親の息子に対する盲目的な愛情、あるいは溺愛といった否定的なニュアンスが強く感じられるからである。

例 4

最後の例は5幕2場226行目からのハムレットの台詞である。ハムレットはレアティーズと剣の試合をする前に、オフィーリアの埋葬の際に激高してレアティーズと取っ組み合いの喧嘩になってしまったことを次のように詫げる。

【例4】

What I have done
That might your nature, honour, and exception
Roughly awake, I here proclaim was madness.

この台詞の中には、ハムレットの行為が激しく刺激したものとして3つの名詞が並べられている。honour が名誉心ということで一番分かりやすい。exception はここでは法的に抗議する権利という特殊な意味で使用されている。nature から exception へと順番にフォーマリティーの度合いが高まっていくように並べられているので、honour が社会的側面、exception が法的側面を強調しているのに対して、nature は個人的な心の問題に焦点を当てているのだと推測できるかもしれない。

実は、ハムレットはこの場面より前に、ホレイシヨールに向かってレアティーズに謝罪する意向を告げている。5幕2場75行目から引用する。

But I am very sorry, good Horatio,
That to Laertes I forgot myself;
For by the image of my cause I see
The portraiture of his. I'll court his favours.
But sure the bravery of his grief did put me
Into a tow'ring passion.

ハムレットは、自分とレアティーズが置かれた境遇は似ているので、レアティーズが興奮する理由も理解してやればよかったと後悔している。この台詞から、ハムレットは、レアティーズが死んだポローニウスとオフィーリアに対して抱く感情を、自分が亡き父を思う気持ちとパラレルにして意識していたことが分かる。例4の“**What I have done**”はオフィーリアの埋葬の際の興奮した振る舞いを指しているように思いがちだが、実際には、ポローニウスを誤って殺してしまったことをより中心的に指していると考えるべきである。そしてハムレットの心の中では、ポローニアスの死を原因とするオフィーリアの死もそこに含まれているだろう。

このように、読者や観客は、ハムレットがレアティーズに正式に謝罪する前に、ハムレット

がレアティーズの境遇を自分の境遇に重ねて、彼に同情していたことを知らされている。したがって、例4の場面でハムレットが正式に謝罪をするとき、ハムレットが一番気に掛けているのは、レアティーズの父親と妹に対するプライベートな感情であることはある程度推測できるのである。

しかし、例4の nature については、ハムレットの謝罪に対するレアティーズの返事の中でよりはっきりと説明されている。そこではレアティーズがもう一度 nature と honour という単語を使って自分の心情を説明している。240行目から引用する。

I am satisfied in nature,
Whose motive in this case should stir me most
To my revenge; but in my terms of honour
I stand aloof, and will no reconciliation
Till by some elder masters of known honour
I have a voice and precedent of peace
To keep my name ungor'd.

レアティーズは、名誉についてはしかるべき人物に仲介してもらい、先例に従って正式に名誉が回復されるまでは納得できないが、nature に関しては満足したと述べている。nature について、本来なら彼を復讐へと駆り立てるべきものと言っているのが、レアティーズがこの場面で使用している nature は、具体的には父を殺されたことに対する強い憤り、そして、彼を復讐へと駆り立てる強い衝動を意味していることが分かる。

レアティーズの返事の中の motive という単語はここでは衝動的な動き、欲求といった意味である。あまりこの単語に注釈をつけている編者はいないが、Philip Edwards は prompting と説明し、人を駆り立てる動きと解釈している。その衝動の強さは、レアティーズの “I am satisfied in nature” という台詞が嘘であることを考えればよく分かる。レアティーズの心の中は台詞とはまさに逆になっている。復讐さえ遂げられれば (nature の点で満足できるならば)、たとえその手段が卑劣なもので、自分の名誉が少々危険にさらされたとしてもかまわないと思っているのである。レアティーズの心の中では、彼を復讐へと駆り立てる nature の衝動的な動きは決して静まっただけではないのである。

このように、例4とそれに続くレアティーズの返事の中で使われている nature は、一義的には肉親を失った悲しみ、そして、彼らに加えられた不当な仕打ちに対する憤りといった感情を意味している。しかし、レアティーズが口にする nature からは、単に深い悲しみだけでなく、愛する者が殺されたときには即座に復讐を果たそうとする瞬発的な衝動、また、復讐を義務と考える強い拘束力のようなニュアンスも感じられるのである。

む す び

シェイクスピアの作品を読む際, *natural feeling* あるいは *natural affection* と定義される *nature* は, *nature* が持つ多くの意味の中でも読者を最も戸惑わせるものである。定義自体が曖昧で分かりにくい点に加えて, この意味は現在では方言に残っているだけで, ほとんど馴染みがないからである。しかし、『ハムレット』の中から4つの例を取り出して検討してみた限りでは, 実際に台詞の中で使用されるときには, パラフレーズや文脈的な説明によって *nature* の具体的な意味はそれほど困難を覚えることなく理解できることが分かった。

例1では, *nature* は兄の死を悼む深い悲しみという意味で使用されていた。*nature* の意味は, 単語の前後に, *sorrow, grief, woe* といったほとんど同じ意味の単語を置くことによって, 具体的に説明されていた。例2では, *nature* を持っているという一見分かりにくい台詞は, ほぼパラレルな表現を前のほうに置くことによって, 父に対して愛情を持っているという意味であることが示されていた。例3では, 母に対する敬意という意味で使用され, 母親に対する敬意を失った人間の残酷な行為が説明されていた。例4では, ハムレットの台詞の中の一見分かりにくい *nature* は, レアティーズの返事の中で敷衍されることにより, 父と妹を亡くしたことに對する強い悲しみ, そして, 復讐への衝動や義務を表していることが分かった。

このように, 4つの例を見る限り, シェイクスピアは, *natural feeling* あるいは *natural affection* の意味で *nature* を使用する際には, *nature* が喚起する感情, 衝動, 義務感といったものを具体的に説明してくれているのである。その説明の仕方は, パラフレーズを直前や直後に置く分かりやすいものもあれば, 少し離れた所にパラレルとなるような表現やより詳しい説明を置く方法もあった。

4つの例すべてにおいて, *nature* は親子や兄弟といった近親者間の感情や義務を表していることに注意しなければならない。もともと *nature* の *natural feeling* あるいは *natural affection* という意味は英語の *kind* の影響を受けていると言われている⁵⁾。名詞 *kind* には家族という意味があり, その形容詞 *kind* は家族に対して忠実な, 義理堅いという意味を持っていた。そして *kindness* という名詞はそのような関係や感情を表していた。*OED* が *kindness* の意味として最初に挙げているのは *kinship, near relationship, natural affection arising from this* という意味であるが, 本論で扱った *nature* はこの *kindness* と同義と考えてよい。つまり, 本論で扱った *nature* の本来の意味は, 近親者との関係, そこから生じる近親者に対する義理堅さ, 敬愛, 尊敬といった意味なのである。ハムレットが居室の場面でガートルードに向かって言う “I must be cruel only to be kind.” という台詞は大変有名なものだが, この *kind* も母親に対して子としての務めを果たすというのが正確な意味である⁶⁾。

本論で見た4つの例の中にも近親者に対する義理堅さや敬愛という本来の意味が色濃く表れているものがあつた。一番はっきり表れていたのは例3である。例3の *nature* からは, 子供が親に対して抱く愛情といった積極的なニュアンスではなく, 子供が親を傷つけるような極端な

行動を自制する、子供の親に対する最低限の尊敬、義務といった本来の意味に近いニュアンスが感じられる。例2の亡霊の台詞からも、普通の人間であれば誰でも持っている親に対する敬愛といったニュアンスは感じられた。同時に、nature は人を復讐のような行為に縛り付ける強い拘束力のようなニュアンスでも使用されていた。これは、近親者に対する義務の極端なケースと考えられ、近親者への義理堅さという本来の意味に近いと言える。

逆に、nature が近親者に対する敬愛や尊敬といった本来の意味から少し離れて、nature が引き起こす感情や衝動の強さの方が強調されることもあった。例2の亡霊の台詞や例4のレアティーズの台詞からは、人を復讐へ駆り立てる衝動の強さに加えて瞬発性も伝わってきた。さらに、近親者に対する過剰な愛情というニュアンスが感じられる例もあった。例1に見られたような、自分のことを顧みず、完全に悲しみに身をゆだねてしまう、あまりに感情的で非理性的な態度である。このニュアンスは例3のところで見たポローニアスの台詞からも感じられた。自分の子供に関して母親たちに偏った判断をさせてしまう盲目的な愛情である。強い感情や衝動を引き起こす nature は、時には制御不能な非理性的なレベルにまで高まりかねないといった否定的なニュアンスで使用されることもあったのである。

このように、シェイクスピア作品の注釈者によって一般に natural feeling あるいは natural affection と説明される nature は、『ハムレット』における4つの使用例を見ただけでも、その意味やニュアンスの幅はかなり広いと言える。冒頭で述べたように、現代のテキスト編集者たちが使用する natural feeling や natural affection といった nature の定義はそれ自体が曖昧である。確かに、愛情や感情の対象は必ずしも近親者に限定されず、人間一般が持つ人間一般に対する愛情という場合もあるので、このような漠然とした定義になってしまうのだろう。実際、シェイクスピアも近親者以外の人間に対する愛情、敬愛という意味で nature を使っている。しかし、本論で見た4つの例がすべて近親者を対象としていたように、シェイクスピアは、natural feeling や natural affection という意味の nature をその本来の意味に沿って、近親者間の関係を表現するときに使用していることが多いようである。そもそも、例外がどれほど見つかるのか興味あるところである。

注

- 1) 『ハムレット』からの引用はアーデン版 (Harold Jenkins 編) を使用している。
- 2) クローディアスは、兄弟愛より野心を優先させ、兄を殺してしまった、いわば unnatural な人間である。そのような男が、兄の妻を妃として迎える気持ちを述べる部分では、盛んに兄に対する愛情を強調している。1幕2場8行目から引用する。

Therefore our sometime sisiter, now our queen,
Th' imperial jointress to this warlike state,
Have we, as 'twere with a defeated joy,

With an auspicious and a dropping eye,
 With mirth in funeral and with dirge in marriage,
 In equal scale weighing delight and dole,
 Taken to wife.

この台詞の表現全体が、まるで台詞の主の性格を表しているかのように *unnatural* である。単に凝り過ぎているというだけでなく、片眼が上を向きもう片方の目が下を向くといったイメージはほとんど滑稽でさえある。シェイクスピアはクローディアスの *unnatural* さを強調するためにこの台詞を与えたのではないかとさえ思われてくる。

- 3) 実は、復讐の義務への言及は亡霊とハムレットが二人きりになった直後にすでに見られる。亡霊はこれから明かす秘密がいかに重大なものかをほのめかして次のように言う。

Ghost. Pity me not, but lend thy serious hearing
 To what I shall unfold.
Ham. Speak, I am bound to hear.
Ghost. So art thou to revenge when thou shalt hear.
Ham. What?

ハムレットは、“Speak, I am bound to hear.”と言って、話を聞く準備ができていることを告げている。それに対して亡霊は、“thou art bound to revenge”という意味の台詞を返す。亡霊は言葉遊びを使用することによって事の重大さを少し隠すようにしながら、自分の話を聞けば、ハムレットは復讐せざるを得なくなるとほのめかしている。

- 4) この *nature* は擬人化された女神と解釈することもできるかもしれない。この例の場合、重要なことは、母親は一般に自分の子供をひいきするものだということである。その原因は、確かに、子供に対する愛情ということになるかもしれないが、さらに遡れば、そのような性質を母親一般に与えた自然の女神と解釈することもできるからである。
- 5) C. S. Lewis は *nature* の *natural affection* (Lewis は *due affection* と定義している) という意味は、*nature* のルーツであるラテン語の *natura* が独自に発達させた意味ではなく、*nature* の意味をカバーしていた英語の本来語の *kind* から取り入れたものだと説明している。つまり、ほぼ同じような意味領域をカバーしていた *kind* と *nature* だが、*family* の意味の名詞 *kind* や *dutiful toward family members* という意味の形容詞 *kind*、さらに、その形容詞の名詞形としての *kindness* といった意味の発達は *kind* 独自のものではあった。しかし、ゲルマン系の *kind* とラテン系の *natura* が互換的に使用され続けている間に、*kind* 独自の意味が *natura* そして *nature* にも入り込んできたという説明である。C. S. Lewis, *Studies in Words*, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 1967; Canto edition, 1990) 第2章参照。
- 6) シェイクスピアの他の作品にも示唆的な台詞がある。それは *As You Like It*, 3幕4場127行目からのオリバーの台詞である。弟オーランドの命を狙っていた浅ましいオリバーは、森の中で眠っているときライオンに襲われそうになるが、弟に助けられて九死に一生を得る。その顛末を説明しているとき、オーランドは兄を見捨ててそのまま立ち去らなかったのかとロザリンドに訊かれて、オリバーは次のように答える。

Twice did he turn his back, and purpos'd so;

But kindness, nobler ever than revenge,
And nature, stronger than his just occasion,
Made him give battle to the lioness,
Who quickly fell before him, in which hurtling
From miserable slumber I awaked.

just occasion は借りを返すチャンス，復讐するチャンスという意味である。引用の2行目と3行目はほとんど同じことを言っていると考えてよい。nature と kindness はここでは同じ意味で使用されている。kindness は，*OED* の1番目の意味，すなわち，kinship, near relationship, natural affection arising from this という意味なのである。